

●ブログ「古田史学の継承のために」議論の記録6

2017年7月30日(日)

●古賀・大下論争を読み解くー「前期難波宮九州王朝副都説」について(川瀬さん)

川瀬さんの表題の文章は、66ページにもわたる詳細なもので、よほどのパワーがないと通読できないように思いました。そこで、私(肥沼)が内容と結論が要約されている「はじめに」と「まとめ」を両端に付け、「全体を読める方はリンクしてある部分も読む」という形にしたところ、川瀬さんご自身にも賛成していただきました。ということで、「はじめに」と「まとめ」はこのような体裁を取っています。ご了解下さい。川瀬さんの願いが皆さんに伝わり、少しでも古田史学の継承が前進すること祈っています。(肥沼孝治)

.....

●古賀・大下論争を読み解くー「前期難波宮九州王朝副都説」について

川瀬 健一

はじめに：

「古田史学の会」の古賀さんによる「前期難波宮九州王朝副都説」については、会員の正木さんや服部さん、さらには富川さんによる、古賀説への補強的研究が展開まとまっているされ、「古田史学の会」の「定説」の様相を呈している。その一方で、会員の大下さんからは、古賀さんの論は「前期難波宮孝徳期宮殿説」を展開する大阪歴史博物館の見解を盲信したもので、その論は古田さんが確立した研究方法からみても間違っただけのものとの厳しい批判がなされ、今でも激しい論争が展開されている。しかし論争を歴史的に振り返ってみると、そもそもこの論争は、2011年の2月から2012年4月の「古田史学会報」上での論争で決着がついており、古賀さんの論が成り立たないことは明白となっていて、以後は、自説にこだわる古賀さんが、大下さんの批判をなかつたことにより無視し、次々と大阪歴史博物館によってなされる「新発見」を追認して自説の証拠として示しているだけのものだ。

また論争を振り返ってみると、一方的に古賀さんが間違っているわけではなく、批判した大下さんの方にも、批判の不十分さや論点のずれが多々見られる。

しかし古田史学の会の会員の中には、多数の論争の意味すら分からない人がいるようであるし、学問を深めるには、当該の論に関わる論争史を振り返ってみることは極めて有益であるので、この問題を論争史として検証してみたい。

すなわち、論争史を振り返ってみると、論争の中の何が重要で、
論争の中でそれがどの程度深められたのかとか、
逆にどの点が深められずに忘れ去られたのかとか、
論争の中に、対立する意見を越えたところに真実があることもわかってくるのだ。
もちろん論争で解決されなかった残された課題も出てくるのである。
そこで「前期難波宮九州王朝副都説」の歴史を振り返りながら、
古賀・大下論争を読み解いていきたいと思う。

●古賀・大下論争を読み解く―「前期難波宮九州王朝副都説」について

<http://kawa-k.vis.ne.jp/2017730naniwa>

まとめ：

「前期難波宮九州王朝副都説」を中心にした古賀・大下論争の詳細な点検と批判は以上の
とおりである。

論争は2012年の夏あたりから冷静さを失い、相互の非難応酬の様相を呈して、2013
年8月15日の古田史学会報117号で、突然の終りを告げてしまった。

論争が個々の論点についての批判・反批判のレベルではなく、どちらがより正しく、
古田さんの学説と方法論を継承しているのかという、正邪論争のレベルに入り込んでしま
ったために、論争ではなくて、会の運営権をも巡る権力闘争の様相を呈してしまったから
であろう。

そもそも古賀さんが、大阪歴史博物館による前期難波宮は七世紀中ごろの朝堂院様式の
宮殿であるとの説に触れ、これは古田さんの九州王朝説の根幹を揺るがしかねないものだ
と理解し、これを九州王朝説から解釈することは可能かと問い始めたのが、始まりであっ
た。

この古賀さんの危惧は正当なものであり、学問的にも意味のあるものだ。

だがこのスタートの時点で古賀さんには大きな躓きがあった。

古田さんの九州王朝説は単なる仮説などではなく、一次史料である中国の正史群の記述
に基づいて導き出された学説であり、同時代の国内史料で、多くの一次史料を引用しては
いるが、近畿天皇家一元史観で歴史を歪め偽造したものである書紀や古事記によっても支
えられるものである。

この学説が古代史学会で認められないのは、古田説がまだ証明されていないからではなく、古田説が、明治以後の日本の国家構造を支える「万世一系の天皇 家」神話を根幹から否定してしまう性格を持っているためであった。

だからこの古田さんの九州王朝説と根本から対立する性格をもつ考古学説が出てきた場合には、九州王朝論者が取るべき道は、第一に、その考古学説の基礎になっている考古学的事実を真実か否かを検証することなのである。

前期難波宮七世紀中期造営説に対しては、発掘された考古学的事実から真にこのように言い切れるのかどうかを、その発掘報告書や論争史を精査して確認し、考古学的事実の解釈が誤っている可能性を探ることであった。

これを当初古賀さんが行うか、古賀さんの説に疑問を持つ人たちが、「発掘報告書や論争史を精査して確認し、考古学的事実の解釈が誤っている可能性を探ったのか」と古賀さんを批判し、共に確認精査作業を進めていたら、最初の段階から、この宮殿遺構が七世紀後半の天武期造営であるとの解釈も可能な考古学的事実が多数あることがわかったことと思う。

またこれに絡んで、九州王朝が評制を七世紀中ごろに施行したとの史料が出てきた場合にも、古賀さんのようにこの史料にあった「難波朝廷天下立評」を、前期難波宮に都した九州王朝が評制を全国施行したと即断しないで、元になった二次史料の内容を精査するとともに、一次史料群である書紀記述の中に、この二次史料が示す事実の痕跡なりとも存在しないのかとの観点から、書紀記述の精査を行っていたら、もっと豊かな研究成果が出て来たものと思う。

古賀説を批判した大下さんらも、後世の二次史料だけでは確定できないと批判するだけでなく、二次史料の精査と、書紀記述の精査を行い、併せて古田さんがすでに、評制は倭の五王の時代に行われた可能性を示唆しているのだから、この先行学説との整合性を史料に基づいて立証することができないかとの方向で論争を進めていたら、今のような水掛け論にはならなかったものと思う。

そして正木さんが古賀さんの「前期難波宮九州王朝副都説」「難波朝廷七世紀中ごろ天下立評説」を支えるようにして「書紀記事」の精査に入ったこと自身は学問的姿勢としては間違いではない。古賀さんの説は考古学説と後世の二次史料に基づいたものなのだから、一次史料群である書紀記述の中にそれを支える史料や痕跡なりとも存在しないのかと考察を進めることは正しい方法である。

ただ正木さんはこれを行うに際して、古賀説と合うからとの理由で、史料根拠もなく書紀記述を次々と34年遡らせることが可能だとの恣意的解釈を行ってしまったところに間違いはある。そしてこれを批判した大下さんらが、恣意的解釈だと批判したことは正しいが、詳細な書紀記述の史料的事実に基づいた批判を行わなかったし、では正木説とは異なって書紀記述はどう読むのが正しいのかを提示しなかったことによって、ここも論争が水掛け論になってしまったのである。

論争の当事者双方が、古田さんの学問の方法を正しく理解してはいなかったのではないか。そして古田さんの学問の結論もまた正しく理解してはいなかったのではないか。

双方ともに古田さんを崇めるだけで、その学問の方法論に基づいて古田説を理解し、その正誤を点検するとともに、古田さんが見つけれなかった歴史の真実を見つけていこうとする姿勢に欠けていたのではないかと思う。

双方ともに、古田さんの学問の方法への理解が浅いまま、古田説をいかに防衛するかとの観点で動いていたように思えるのである。

このため考察すべき道筋が正しく理解されず、明らかにされるべきところが明らかにされないまま、論争が、古田説とその方法論を正しく継承しているのかという、正邪論争のレベルに入り込んでしまって、学問的論争ができなくなったというのが、この論争の真相であったと私は考える。

私のこの「論争を読む」を読んでいただき、もう一度論争の原点に立ち戻り、学問的論争に戻って行くことは可能だろうか。

「古田史学」の成果を継承するためにも、ぜひもう一度、学問的論争に戻ってもらいたいと切に希望している。（2017年7月29日）

コメント

川瀬さん

RE:”古賀・大下論争を読み解く―「前期難波宮九州王朝副都説」について（川瀬さん）”

丁寧な分析有難うございました。ご指摘の通りと思います。振り返って見ると、小生の力量の不足から最後の段階で感情的になってしまったことは十分に反省し、今後に生かしたいと思っています。

なお64ページ最終行で「論争ではなく会の運営権をも巡る権力闘争の様相を呈しまったからであろう」と指摘されています。

これに対し事実関係を下記します。

<副都説批判の展開のはじまりと終り>

小生は学生生活の4年間を上町台地ですごし、入社した会社も本社が心斎橋で大阪はいわば地元です。その土地勘、そして大阪歴博の金曜講座に参加し発掘報告を聞いていたのですが、講演者の生の声を聞いた感触からどうしても古賀さんのいう「九州王朝副都」が上町台地にあったとは考えられませんでした（その頃の関西例会で古賀説は「魅力ある新説」と捉えられていました）。

それで2010年10月から関西例会で副都説に対する疑問をなげかけ始めました。11年12月の会報107号から小生の会報投稿文はその間の関西例会での発表資料をベースにまとめたものです。

関西例会では多くの方から小生の「副都説批判」を擁護する発言をいただきました。関西例会の雰囲気は古賀氏に第1446話（下記）にある通りで、決して皆さんがボーと見過ごしていたものではありません。ただ「副都説批判」をする側の声はとても小さくて、基本的に小生は孤立した状態で、この時に関西例会に参加された方はだれも小生が「権力闘争」をしていたなどイメージされなかったと思っています。

そしてご指摘の通り13年8月の会報117号で論争は打ち切られました。

その時に古田先生が介入されたことは事実ですが、先生は小生の立場にたって介入されたのではなく、同じ会報117号の「いじめの法則」2頁に記されているように「真の論敵がどこにあるか。明瞭である。」古田史学内部の争いに熱中してはならない”こと、自明の真理だ」との理由だったと思っています。

小生はすぐに古田史学の会の役員から身を引き、地元の仲間と「豊中歴史の会」をつくり、一般の方に古田史学を広める活動に専念しました。

また元古田史学の会役員であった木村賢司氏が取り組まれた『阿每多利思北孤—この本を中学生と高校生の皆様へ』の出版作業に参加しました。

昨日も地元の自治会の集会で「日出処の天子は誰か」を講演し猛暑の中多くの方にきていただきました。古田先生も『真実に悔いなし』の335頁で小生の活動を評価していたいており、この時に小生が取った行動は間違っていなかったと思っています。

<その後>

そして古田先生が亡くなられてからのことは「東京古田会ニュース」172号の拙論の通りです。

一般の方に”史料事実を基に「壹」は「壹」と読む”と順序よく古田先生の説を紹介すると、誰でもが「目から鱗だ」と我々が最初に感じたと同じような感想を語ってくれます。ところが、豊中の人に”日本書紀に書かれている「味経宮」は実は「難波宮」と読む”と理由も示さずに説明しても誰も相手にしてくれません。

小生は「権力闘争」などしているのではなく、古田先生から教えてもらった「あたり前のことをあたり前に処理する」世界に生きたいと思い、そしてその世界が少しでも広がることを期待しているだけです。

ご理解をお願いします。

.....

第1446話 2017/07/08

「古田史学の会」関西例会は、おそらく古田学派の研究例会でも最も激しい論争が行われるところだと思います。特に古田説と異なる新説に対しては容赦のない質問や批判が寄せられます。しかし、それは「古田説と異なる」という理由での批判ではありません。古田説や従来説と異なる新説（異説）だからこそ発表するのであり、同じ内容ならそもそも研究も発表も不要です。「古田先生の説と異なるからダメ」というのは学問的批判でも学問的態度でもありません。それは一元史観の学界が古田説・多元史観を「大和朝廷一元史観の通説と異なる」という「理由」で排除したのと同様の態度でもあるのです。

そうした関西例会での厳しい質問や辛辣な批判に耐えきれず、参加されなくなった方も少なくありませんが、「学問は批判を歓迎し、真摯な論争は研究を深化させる」とわたしは信じています。ですから、直接口には出しませんが、それほど批判されるのがいやなら発表などしなければよい、いつそのこと研究などやめて「歴史小説」でも書いていれば誰からも批判されないのにと、わたしは思っています。なお、歴史小説を見下しているわけでは決してありませんので、誤解のなきよう。優れた作家による歴史小説は、研究者でも及ばないような生々しい歴史の真実を復元することができるからです。

投稿： 大下隆司 | 2017年8月1日(火) 19時01分

大下さんへ

詳しい事実関係を示していただきありがとうございました。

「権力闘争」の件。

ちょっと書き方が不十分でしたね。私の感触では、会の運営権を維持するために古賀さんらが反対意見を会から排除したと感じています。これを「会の運営権をめぐる権力闘争」と表現しました。そしてもう一つ、大下さんにはそんな意図はないけれど、「古田説無視」「古田さんの方法論を無視」と言われた方としては、まさに自分たちこそが異端だと言われたと感じたと思いますので、「自らこそが正統である」として「異端」とした大下さんの論が会報に掲載されることを拒否して、会の運営を独占されたのだと思います。

古田さんの「内部闘争にうつつを抜かすのではなく真の敵を見据えよ」との指摘で会の役員を辞めて、古田史学を広める活動をされたとのこと。これはこれで正しいと思いますが、会の中での論争は辞めてはいけなかったと思います。古賀さん正木さんが大下批判を無視していることは看過すべきではなかったと思います。具体的に批判すべきことはたくさんありますから。

古田さんの介入の件。

ご指摘のとおり、真の敵は古代史学界だよと指摘することだと思います。でも同時に、

古田史学の会の中で、古代史学界と同じく自説に都合の良いように史料を改変してそれで良しとする傾向が強いことへの危機感もあったと思います。

ただ古田さんは常に会に対しては、外から論争を温かい目で見守るという態度だったと思います。先生が論争に介入したらそれで決め打ちですから論争が終わってしまいます。それでもあえてなんども論じたのは、古田さんが「あなたの方法は間違っています」と具体的に分かりやすく指摘したのに、それを受け入れずにますますエスカレートした人が会員の中にいたからだと思います。「これをきちんとわからせるのは自分の仕事だ」と感じられたのではないのでしょうか。

ただ一点。古田さんの関わり方に疑問があります。それは古賀さんの「前期難波宮九州王朝副都説」をきちんと批判しなかったこと。古賀さんとそれを補強するための正木さんの方法論からの逸脱は見逃してはいけなかったとおもうのです。

特に論争の最後の局面が、「古田説無視か否か」「古田さんの方法論無視か否か」の正邪論争＝正統・異端論争になっていたと思いますし、双方に方法論の間違いも見受けられるのですから、先生としては、この状態を放置してはいけなかったと思います。

すでに論争を続ける体力がなかったのかもしれませんが。

追伸：この論をまとめるために、天武紀と持統紀も精査してみました。なんとここでも、天皇の言動を記す際に、主語を省略する記述法と、主語を天皇と明記する記述法とが並列していました。前者は九州王朝の天子、後者は近畿の王である天武・持統の行動です。

となると、「難波に都をつくりたい」との詔は天武のものではなく九州王朝の天子です。そして焼失した難波の都は、文字通り九州の難波に新たに作られた九州王朝天子の宮です。天武の新宮は名前が伏せられています。天武 7 年が初出です。書紀編者は天武の新宮の名を伏せることで、これと、九州王朝の難波宮や飛鳥浄御原宮が同一視されるようにしたのかもしれませんが。

また持統紀の「吉野行幸」ですが、ここも二種類あります。主語のない「幸吉野」と「天皇幸吉野」の二種類あります。

さらに持統紀で藤原宮もしくは藤原の宮地候補地への行幸の場合にも「幸藤原（宮）」と「天皇幸藤原（宮）」とがあります。「藤原宮」にも、大和の「藤原宮」と九州の「藤原宮」があるようです。

また天武紀と持統紀の詔群ほとんど九州王朝の天子の詔です。まだまだこの時期にあっても、九州王朝は立て直そうとしていたのだと思います。

これらのことについては、別途詳しい論考にします。

投稿：川瀬健一 | 2017年8月2日(水)08時38分

川瀬さん

ご理解いただき有難うございます。

なお難波宮遺跡について最近調べたことを下記します。

<文武の難波宮行幸記事>

大阪歴博の金曜講座で以前次のような話を聞いたことがあります。

1) 文武の難波宮行幸記事から昔は「前期」と「後期難波宮」の中間に「中期難波宮」が存在したとの説があった。

2) しかし、朝堂院発掘の時に全面的に焼け跡が見つかったことから、この焼け跡が「書紀」の朱鳥大火記事を裏付ける証拠となり、「中期難波宮」の説は消えた。

川瀬さんの「洛外日記の古賀氏と李陽浩氏の話」のところを読んで、李氏が別の講演で、「後期難波宮は前期難波宮とまったく同じ平面に建てられていて、朱鳥の火事（686年）と後期難波宮の建物の建設開始時期（726年頃か）が余りにもあいている。発掘状況から見ると大きな疑問が残されている」と話されていたことを思い出し、歴博で発掘報告書を調べてきました。報告書を書いたのが李陽浩氏です。

<朝堂院発掘報告のコメント>

李氏は報告書『難波宮址の研究』第十三第四章「遺構の検討」95頁に「前期難波宮焼失後の整理作業は、実は後期難波宮直前になされたのではないか、という可能性がある」と記しています。

<朱鳥の大火記事>

書紀天武紀では朱鳥大火記事の後でも、宮殿が全焼したにも関わらず、何事もなかったかのように朝廷行事が淡々と行われています。

これらのことから、「書紀」にある朱鳥の大火記事は、実は博多湾にあった難波長柄豊崎の宮が焼けた記事で、上町台地の火事ではなかった。「天武の時作られた上町台地の宮殿は686年時点では焼けていなかった」と思えます。

もっとも何故、「後期難波宮建設直前に起きていた上町台地の火事記事が『続日本記』に記されなかったのか」の疑問は残りますが。

ご参考までに朝堂院発掘報告書の該当箇所を別途メールします。

投稿： 大下隆司 | 2017年8月3日(木) 17時07分

川瀬さんへ

最近会員のかたから、「今まで副都説論争はよくわからなかったが、川瀬さんの分析を読んで大変良く理解できました」と言われて嬉しく思っています。

せっかく「古田史学」で集まった人たちがバラバラになってしまうのは残念でしかたがないと思っていました。と言って会が古田先生と別の方向に進んでいくのも意味がありません。

なかなか皆さんに理解してもらえないと思っていましたが、この原因は小生の説明不足だったのですね。良く反省して、これからは丁寧に説明するように努めたいと思っています。

本当に有難うございました。

投稿： 大下隆司 | 2017年8月26日(土) 10時03分

大下さんへ

>最近会員のかたから、「今まで副都説論争はよくわからなかったが、川瀬さんの分析を読んで大変良く理解できました」と言われて嬉しく思っています。

私の論考がお役に立てたようで嬉しいです。

もう一度古田史学の会が、論争の原点に戻って論争をやり直せることを祈念いたします。

投稿： 川瀬健一 | 2017年8月26日(土) 23時24分

はじめてメールします。多元の会の大墨と申します。古賀・大下論争を読ませていただきました。冷静な視点で隈なく理解されているようで、感動しました。私も11月の例会で「副都論」に対する古田氏の批判や古賀氏・大下氏の論争を考える報告をしました。12月にはそれに対する服部さんの反論があり、ついでに、私の反論を「古田史学会報」に投稿したところです。川瀬さんにも是非お読みいただき、ご意見を伺いたく連絡しました。

投稿： 大墨 伸明 | 2017年12月19日(火) 15時32分

大墨さんへ

ご連絡ありがとうございます。古田史学会報に掲載されましたら肥沼さんにコピーして頂いて読んでみます。

もしできればその前に、11月に大墨さんが報告された内容（レジュメ資料など）とこれに対する服部さんの反論（12月）の資料を頂けるとありがたいです。

資料を送ってくださる場合には、私のサイトからメールできるようになっていますので、これを使用してご連絡をください。返信で私の住所などお知らせします。

古賀さんの「前期難波宮九州王朝副都説」への批判の根幹は、古田さんの九州王朝説は中国の史書の資料批判でなりたった厳密な学説。これは疑いようもありません。これに基づけば7世紀中ごろに近畿地方に中国北朝形式の都があるはずがなく、その形式の都だとすれば7世紀の末に九州王朝から近畿天皇家が事実上列島宗主権を奪い取った時代の近畿天皇家の都だということです。つまり天武朝期のもの。したがって年代は7世紀末。この遺構を七世紀中ごろとした大阪歴博の考古学的判断が間違いと結論づけられます。だからこの見解にそってその考古学的判断が正しくはないという証拠を積み上げれば済むものです。

なのに古賀氏は大阪歴博の年代比定を盲信して、ここに依拠して九州王朝説を修正してしまった。ここが間違いだということです。

単純明快だと思います。

投稿：川瀬健一 | 2017年12月20日(水) 21時51分